

■特集■心の花の先輩「あんな人・こんな人」

久松潜一

久松宏二

久松潜一は明治二七年十二月十六日に愛

知県知多郡東浦村で生まれた（日清戦争の始まっての頃）。子供時代から読書好き

で、九歳の頃、雑誌『少年世界』『世界お伽噺』を愛読。十歳の時、田山花袋『池大雅』を

読んで以来、大雅が好きになる。愛知一中時代（十三歳〜十八歳）、スバルタ教育で

名高い日比野寛校長の教育方針から影響を受ける。日比野先生の話す「ゆっくり休ま

ず」を、潜一はその後の人生の目標とする。

第八高等学校三年の頃から『万葉代匠記』を読み契沖に関心を持つ。大町桂月の

『円珠庵契沖』は内容と文章の美しさで愛読。大学の卒業論文に契沖を書くことを決

める。
・契沖にはじまり契沖に終はらんわが学び春を迎へてことしも思ふ

『契沖全集』は大正十五年〜昭和二年刊行。そして昭和四八年〜昭和五年に『契

沖全集』が新たに再刊。潜一は昭和五年三月二日（八一歳）没。文字通り生涯を通

じての契沖研究であった。

・道真も契沖もめでし梅の花ことしも咲きぬ清くすがしく

昭和四五年の歌会始の儀で召人を務めた時の詠進歌。道真・契沖二人への想いと晩

年まで愛でた白梅を詠む。（東浦町中央図書館に「久松潜一」の展示とこの歌碑がある）。

・白梅と桜椿に百合紅黄菊白菊わが好む花
潜一が過ごした庭には今も白梅が咲き誇る。

さて、潜一の人生に大きな影響を与えた人物に佐佐木信綱がいる。

・わかき日にその万葉講義き、しことあざやかに心には残りてあれど

東京帝国大学で講義を受けた潜一は、信綱の思い出を次のように述べる。「佐佐木

信綱先生は講義のはじめに方々で見られた新しい書物のことを語られた。書物に対する

新しい知識が得られるとともに古本屋漁りの興味をも教えられた」大学三年の時

にその主宰される『心の花』で賀茂真淵の

百五十年の記念特集をする時、私にも書くように言われた。それで卒業論文の一節として書いた『万葉学に於ける契沖と真淵』という一文を載せることにした。その後、

信綱等の指導で『校本万葉集』『諸説』の項担当（二四歳）、信綱等と共に『契沖全集』

編纂に従事（三一歳）。その間、大正十一年（二七歳）信綱三女三枝子と結婚。四男

一女を授かる（長男・長女は幼少時に死去）。

潜一の東京での住まいは、西方町・千駄ヶ谷等を経て昭和十年以降、練馬となる。孫

の兄（洋一）と私（宏二は中学三年まで）はその晩年を一緒に暮らした。

・老いづくと子にとめられし冷水摩擦を夏だけはする孫と一所に

幼稚園の「冷水摩擦」推奨に毎朝始めた潜一と兄の写真が今も残る。

・もう一度パーピーに逢ひたしといふ孫よ人の世の悲しみをなれも思ふか（わが

家に五年ほど飼ひし老犬パーピー七月の末に逝く）

庭の犬小屋で亡き老犬を囲み、家族で手を合わせたことが今も記憶に残る。十五年

間一緒に暮らした孫の私にとって、潜一はとても優しい「おじいちゃん」であった。

参考文献 『冬花集』久松潜一歌文抄